

「汝^{なれ}や知る 都は野辺の 夕雲雀 上がるを見ても 落ちる涙は」(『応仁記』)

応仁文明の乱(1467~1477)により、京都は二条以北(上京)を中心として灰燼に帰しましたが、飯尾六左衛門尉清方という当時の室町幕府の奉行人が詠んだ歌です。

それから100年後、花の都の賑いは復活していたようです。そのことを如実に示すのが屏風に描かれた『洛中洛外図(上杉本)』です。数ある洛中洛外図の中で、最も保存状態が良く、唯一の国宝指定。屏風のサイズは縦1.6m・横3.6mで、左右2枚で一对です。

従来全く異質なものとして、永久に交わることはないと思われていた大和絵(土佐派)と唐絵(狩野派)とを統一したという点でも、まことに画期的で偉業とさえ云われています。また、江戸期に普及した風俗画(遊楽図・歌舞伎図・合戦風俗図・職人^{づくし}図など)の母胎になったことも確かであり、その意味では浮世絵のルーツでもあるのですよ。

さて、『北越軍記』という江戸期の書物があります。兵学者・雲庵の作と伝わるもので、地名・人名や事実関係の誤りが多いと指摘されますが、その中に下記の記述があります。

「天正二年申戌四十五歳、三月、信長公ヨリ両使(柴田右馬助、稲葉弥助)ヲ以テ、洛中洛外ノ図ノ屏風一双、源氏物語ノ屏風一双、何レモ狩野永徳筆、極彩色ナリ。是レヲ謙信へ進入。事ノ外ノ懇意ナリ。・・・(以下略す)」

即ち、天正2年(1574)3月、織田信長の使者2名が越後の上杉謙信を訪れ、2点の屏風絵を贈った。一つは洛中洛外図、もう一つは源氏物語で、描いたのは狩野永徳であると。

武田信玄が没し、また室町幕府の滅亡(15代将軍・義昭を追放)がその前年ですから、天正2年といえば信長が覇権をほぼ手中に収めた頃となります。一方、謙信自身は4年後の天正6年に脳溢血によって落命することになりますが、この時点においては尚も入京の機会を窺っていたはずです。信玄に対しての信長との同盟も有名無実と化していました。

金雲の間から見える将軍家・貴族の邸宅や神社仏閣、四季の風物詩(祇園祭や正月飾、梅や桜が匂い紅葉に染まる山野など)、さらには活発な商いや庶民の暮らし振りが描かれ、謙信には都の華やかさはこの上なく眩しく、愛しいものに映ったであろうと想像します。

絵中に鶏合わせ(闘鶏)の場面が描かれ、お供に見守られながら眺める子供が居ります。武衛陣^{ぶえいじん}(旧斯波氏邸)前と判るので、13代将軍・義輝の幼君時代だろうと思われま。謙信はこの義輝を奉じて入京を果たそうと動いておりましたから、いわば特別の存在です。

屏風絵が謙信に贈られる9年前(永禄8年;1565)、義輝は三好義継や松永久秀らに殺害されましたので、信長としては(あなたの野望は夢のまま終わりましたよ、もうあきらめなさい。)という無言のメッセージを送ろうとしたのかも知れませんね。

さて、この洛中洛外図は信長が永徳に命じて描かせ、そして謙信に贈ったとされますが、どの年代の都なのか（景観年代はいつか）、実際の製作年代はいつか、描いた絵師は本当に狩野永徳か、誰が永徳に依頼したのか、贈り主は本当に信長か、なぜ上杉謙信に贈られたのか、そしてそもそも屏風絵は何を描こうとしたのかを巡り、議論百出の代物なのです。

今谷明氏の説＝【景観年代は天文16年(1547)7月19日から翌月5日までの16日間】が注目を浴びました。この説でいくと、永徳は僅か4歳の時ですから描くのは無理となります。

氏は『北越軍記』以外の古文書も調べた上で、絵師を永徳と断定するのは危険だと指摘し、さらに従来の通説が唱える永禄年間(1558～70)であれば、描かれてもおかしくない鉄砲を抱えた人物やキリスト教宣教師の姿が全く見られないのは重大な疑問である、と論じました。

南蛮文化に関心を持った信長が絵の依頼者ならば、必ず描かせるはずです。そうするとフランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸しキリスト教を伝えたのは天文18年(1549)ですから、その前の天文16年であれば描がきようもないということですね。また、義輝はこの時点では11歳ですから、この点でも絵の内容(武衛陣前の幼君)と符合します。

本来なら、上杉家の古文書に詳細に記されていてもおかしくない屏風絵にもかかわらず、実際にはそうではありません。何故か？ おそらくは謙信にとっては好ましくない理由があったと思われるのです。考えられる理由として、屏風絵は信長からではなく、他の人物から贈られるはずのものであったのではないのでしょうか。

(興味ある方は、『謎解き 洛中洛外図』黒田日出男著、岩波新書をご参照下さい)

他に、小澤弘氏が数えたところ、登場人物は合計2,485人で、内訳は下表の通りです。

京都は公家の町という印象が強いですが、屏風絵では全く異なります。当時は既に武家社会であったということでしょうか。また一般庶民も多く描かれています。商人を中心に都市経済の担い手として、なくてはならない存在になってきた表れと思われる。

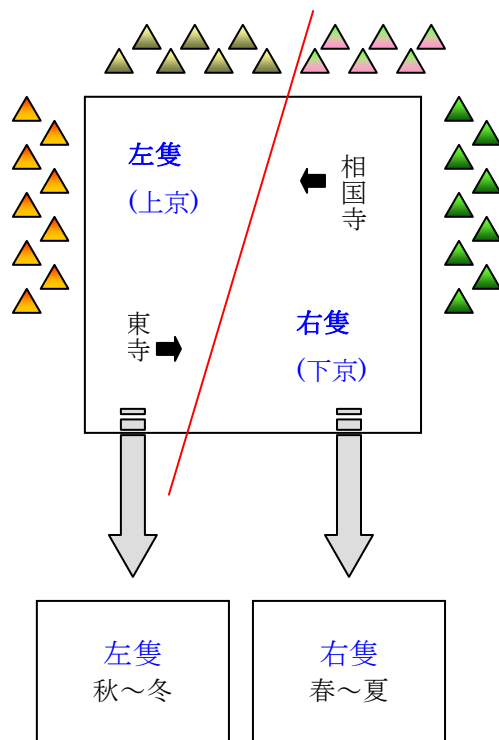
合計		2,485人	比率
内訳Ⅰ	武士	624人	25.2%
	神僧職	198人	7.7%
	商人	175人	7.1%
	職人	79人	3.2%
	芸人	58人	2.3%
	農民	48人	1.9%
	貴族	43人	1.7%
	不明	1,260人	50.7%
内訳Ⅱ	男	1,968人	79.2%
	女	354人	14.3%
	幼児	125人	5.0%
	不明	38人	1.5%

商売としては、扇屋・紙屋・烏帽子屋・弓屋・米屋・饅頭屋・材木屋・履物屋・柵屋・桶屋・筆屋などが見受けられ、行商人らしき姿も多い。また、祇園社の門前には茶屋、その他に床屋と風呂屋の風景が見られる。

不明者の人数が多い理由は、通行人や参詣人、さらに山道に行く旅人について職種が特定できないためである。商人職人はさらに数が多いと思われる。

人以外に動物も登場し、馬・牛・犬・水鳥・鶏・鷹・猿は見受けられるが、猫は見当たりませんね。

左右2枚（左隻・右隻と呼びます）の洛中洛外図について、少し概観してみましょう。



上杉本の構図は、左図のように京都を斜めに分割し、西北半分（上京中心）を左隻に、東南半分（下京中心）を右隻に描いています。また相国寺の七重塔（現存せず）から上京を、東寺の五重塔から下京を俯瞰した景観のようです。

左隻の中心はやはり足利將軍邸で、武衛陣の義輝もこちらです。右隻には内裏（＝御所）と祇園会とが重きをなしているようです。

四季の移ろいも考慮しており、左隻には秋から冬が、右隻には春から夏が描かれています。但し、左隻の將軍邸あたりに正月風景を配し、他の洛中洛外図には見られない季節の乱れを意図的に表現していると思われます。

全体的には年中行事や祭礼の場面が多くて、こういうものを「月次絵（つきなみえ）」と呼びます。毎年決まった月に決まったように催される、「つきなみ」の意味がよく解りました。

景観年代は未だ特定されてはいませんが、16世紀の中葉であることは確かなようです。西洋ではピークは過ぎたもののルネッサンス期、世紀初頭にはレオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』とか、ミケランジェロのシスチン礼拝堂壁画が製作されていました。

江戸期においても洛中洛外図は数多く製作されますが、上杉本らの室町期と比較すると、全く違う建物が現れます。それは二条城です。面白いのは、左隻の中心には二条城があり、右隻には秀吉ゆかりの方広寺大仏殿が描かれ、あたかも勢力を張り合うような構図です。絵の発注者や絵師などの何らかの意図が働いた証かと思われませんが、屏風絵の中で関ヶ原の戦い（徳川家康 v s 豊臣秀吉）が再現されているように見えます。

上杉本が描かれた時代というのは「乱世の時代」と表現されることの多い時期ですが、一面では活性化されていた時代で、外に向かっても窓が開かれようとする、陰陽の「陽」の時代であったと思います。既存の権威（天皇・公家・武家）が為政者であるものの、一般庶民が経済活動の中心の担い手となり、顕著に存在感を増し始めるという質的な変化が大きいと思います。

絵の発注者や絵師が誰かは確定せず、また描いた意図も明瞭ではありませんが、まさに質的な変化を映し出すものとなりました。その意味では、劇的な一瞬を示す写真でないにもかかわらず、むしろ絵画であるがために一層リアリティーを伴って迫ってくるものがあるようです。

飯尾六左衛門が涙した、あの夕雲雀は、庶民に姿を変えて舞い降りたのかも知れませんね。

洛中洛外図屏風の関連年表

年代	関連事項	足利将軍
応仁1(1467)	応仁文明の乱開始; 祇園会(祇園祭)が中絶	8代 義政
文明9(1477)	応仁文明の乱終結	9代 義尚
明応9(1500)	祇園会が復興	11代 義澄
天文5(1536)	足利義輝誕生(父は将軍義晴)	12代 義晴
天文12(1543)	ポルトガル人が種子島に漂着; 鉄砲伝来 狩野永徳誕生	
天文18(1549)	フランシスコ=ザビエルが鹿児島上陸; キリスト教伝来	13代 義輝
永禄4(1561)	長尾景虎が上杉家を継ぎ関東管領となる; 謙信と称する	
永禄8(1565)	三好義継・松永久秀らが義輝を殺害(30歳) (永徳21歳)	14代 義栄
永禄11(1568)	織田信長が足利義昭を奉じて入京; 将軍義栄を追放 京都に南蛮寺(永禄寺)建立開始	
永禄12(1569)	信長がルイス=フロイスの伝道を許可する	15代 義昭
元亀1(1570)	信長と本願寺(11世顕如)との石山合戦開始	
元亀2(1571)	信長が比叡山延暦寺を焼き討ち	
天正1(1573)	武田信玄死去(53歳)	
	室町幕府の滅亡(信長が将軍義昭を追放)	
天正2(1574)	信長が謙信に『洛中洛外図屏風』を贈る (永徳31歳)	
天正4(1576)	信長が安土城を築城開始; 永徳が障壁画を描く	
天正6(1578)	上杉謙信死去(49歳)	
天正8(1580)	石山合戦終結	
天正10(1582)	本能寺の変; 明智光秀が信長を急襲し信長が自害(49歳)	
天正14(1586)	秀吉による方広寺造営開始→ほぼ完成は慶長16(1611)	
天正15(1587)	秀吉による聚楽第が完成	
天正18(1590)	狩野永徳死去(48歳)	
天正19(1591)	秀吉の寺地寄進により本願寺(後の西本願寺)を建立	
文禄3(1594)	伏見城が完成し秀吉が移る	
文禄4(1595)	聚楽第を取り壊す	
慶長3(1598)	秀吉死去(63歳)	
慶長5(1600)	関ヶ原の戦	
慶長7(1602)	家康の寺地寄進により東本願寺を建立: 東西本願寺の分立	
慶長8(1603)	徳川家康が将軍となる; 江戸幕府開始	
	二条城がほぼ完成	